

4月総評

西躰 かずよし

今日は若い書き手や新たな書き手の作品に惹かれた。そこには時代の閉塞感を映し出しているかのようなものもあった。

さんずいの  
ように  
途切れたちんもくへ  
きみは母音のといきをもらす

さいう 石川県

傷つくことがわかっていても敢えて困難な方へと進んで行く語りに惹かれる。そのことは同じ作者の「みもぎ咲く丘を／あなたと駆け下りて／こどう をえいえんにしたかった」「はなびらの／ 点字を／たどるいもうとの／髪にながれる夜風のひかり」といった作品からもうかがえる。語り手は、えいえんへの希求に身を焦がしながら、どこまで進んで行くのだろう。

鏡台 散らかる  
I MY ME MINE

氷丸 茨城県

人称代名詞を覚えたのは中学生の頃だろうか。散らかった鏡台と、それに相対する「I MY ME MINE」という響き。人称代名詞を呴く主体と散らかった鏡台は、互いに交わることなく、おののの場所に置き去りにされている。

花に鳥  
ホモサピエンスにあるぴえん

日下部 友奏 東京都

語り手は、ホモサピエンスに「ぴえん」を見つけたとき、世紀の大発見をしたと思ったに違いない。いや、少しそれは大げさかもしれない。ただ書くということは、そうした勘違いの積み重ねのようにも思う。ささやかな発見が世紀の発見につながってしまうほど自由で、ときには独りになってしまうような。

コンセントさすときの音花曇

有野 水都 東京都

コンセントをさすときの乾いた音。そのわずかな音が、室内の静けさをより鮮明にする。花曇という季語と音の描写がもたらす効果だろう。登場人物の息遣いまでもが聞こえてくるかのようである。

何も無い冷蔵庫だけが暖かい

橋詰 桜京 東京都

「何も無い」と書いてしまうことについての贅否はあると思う。ただ暖かくはないと思われる冷蔵庫を、そこだけが暖かいと書ききることで、「何も無い」という一節は、読み手にとって切実なものとなる。

いつまでも未来ばかりの人生で  
ニューススタイルにゅーすたいる

全美 神奈川県

人生をいつまでも未来ばかりのものと書くことによって、その虚ろさが浮き彫りにされる。生きてきた足あともなく、生きている実感もないような場所。ニューススタイルの繰り返しが、そうした印象をより強固なものにする。それは、未来に希望を先送りしつづける、僕たちのうしろめたさと虚ろさを表しているのだろうか。

履歴書に書くためだけの俳句詠む

洋梨 またら 群馬県

履歴書は就職という目的のために書かれるものだから、経歴、資格を含めた自身の売り込みがすべてで、それ以上でも以下でもないと思う。この作品に僕が惹かれるのは、たとえそれが思い込みに過ぎなかったとしても、自身のすべてを賭けて書いたかもしれないものを、履歴書に書くだけのものと言ってしまったところにある。

生きていて扇風機売り場を通る

福山ろか 埼玉県

なんということのない扇風機売り場を横切るという行為に「生きていて」ということばを付け足さざるを得なかった理由。それは、生の実感を確認しなければならないという焦りと言えるかもしれない。こうした感情は、生きていることが単なる偶然に過ぎないところから来るものなのだろうか。

ヘッドホン外して冬の星を増やす

福山ろか 埼玉県

ヘッドホンを外して自然と一体になることで、冬の星は増えるのかもしれない。

そして、もしそれがほんとうであったら、どんなに素敵だろう。

ヘッドホンを外した後の冬の星は、語り手にとって星そのものであったに違いない。

深海にひかりを配達する業務

高田皓輔 千葉県

ひかりの配達というのは美しい営みを想起させる。なぜ深海にまで運ぶのかには触れられていないけれど。語り手の共感は、おそらく誰に褒められるわけでもない。ただ深海でひっそりと暮らす生きものたちへと向けられているのだと思う。

殺虫剤吹きかけた後のつやつやの  
ゴキブリと床の冷たいにおい

狛犬　吠　　岡山県

殺虫剤を吹きかけた後の床。殺虫剤を吹きかけるというありふれた情景。語らなければ  
ならないことは、条件がそろえば殺意もなく簡単に殺すことができるという自身の実感の  
なかにあるのかもしれない。日常のなかにあるざらざらとした感覚。同じ作者の作品に  
「薬物の防止ビデオの幻覚が／美しかった　を消しゴムで消す」といったものがある。

ねむれない容積の中で  
よるの頬杖を組み立　　ててから

立花ばとん　　東京都

夜の頬杖を組み立ててから何をするのだろうか。  
リズムとイメージの屈折が美しい。